

---

# 淋シキ人間ノ愛唄

梓川深層

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

淋シキ人間ノ愛唄

### 【Nコード】

N9769P

### 【作者名】

梓川深屑

### 【あらすじ】

小話、ポエム、独り言、あります。

## 淋シキ少年ノ愛唄（前書き）

詩集みたいなものです。

一つ一つがまったく違うものになっています。

楽しんで頂けると嬉しく思います。

## 淋シキ少年ノ愛唄

淋しき少年の話をしましょう。

昔々と言うには鮮明すぎる記憶。

生きる理由

自分の理由

何一つわからずさ迷っていました。

モノクロームの世界を

どうでもよく

ゆっくりゆっくり歩いていました。

少年は泣くこともできぬ弱虫でした。

優しく歌った少女の話をしましょう。

優しいと言うには哀しすぎる少女。

僕と比べ 貴方は傷だらけでしたね。

でも

誰よりもずっとずっと強かった。

この世に生きた少女でした。

二人が出会ったのは

土砂降りのPM3・26

少年は少女に包まれて

泣けるという名の強さと

切なく優しい少女の歌を手に入れた。

貴方の声を 温もりを

僕は決して忘れない。

忘れたくない。

少女が最後に言った言葉

「前を向いて生きなさい」

少年が言えなかった言葉

「強く生きるよ」

だから誓った。

命ある限り貴方のウタを歌うこと。

全てのものに愛をかかげること。

この空の下で生きる愚か者よ。

その命を投げ出さぬことを誓え。

どうか　生き抜いてくれ。

僕も生き抜く。

生き抜いてみせるから。

## コノ世ニ生きるアル少女（前書き）

雰囲気で言うと、rhythm（前作）の感じのものです。

## コノ世ニ生きるアル少女

か細い体を振り絞って。

今日で最後の歌を歌うみたい

両手でしっかり

マイク握り締めて

君は言ったね。

「生き抜いてくれ」って。

細くてちっさな体で

世界中の人たちに

祈りを込めて歌ってたね。

そしてにっこり微笑んで

「俺も生き抜くから」って言った。

たったの17歳で、

君は何を見てきたの？

光に溢れたステージで

どうしてそんなにも堂々と、人々への愛をかがけてられるの？

どうしてだろう。

君の瞳は、いつもどこか寂し気なのに

君の言葉は、いつも聞き手の弱い心を強くしてくれる。

私も前より強くなれたんだよ。

みんな君を想ってるよ。

――届くかな。届いているかな。

…届けばいいのに。

## 空と星と人（前書き）

詩、です。

夕方、一人でいて寂しくなったときに書いたもの。



## 空と星と人

薄暗い夕方

今日はもう終わるんだと

ふと思い

思わず出た溜息

「今日私は、ちゃんと笑えていましたか？」

「今日私は、ちゃんと生きていましたか？」

誰かに聞いたわけじゃないけれど

誰かに答えて欲しかったんだ

誰かに見ていて欲しかったんだ

時に人は残酷なくらい冷たくて

とても恐ろしいものになるけど

時に人は痛いくらい優しくて

とても眩しいものになる

信じられないもの

信じられるもの

どちらにも当て嵌まる

それが人間

夜空に浮かぶ星たちは

何を思い光輝くのだろう

誰かに見てもらいたくて？誰かに”きれいだね”と言われたくて？

下にいる私達に気づいてもらわなきゃ

存在する意味なんてないものね

きつと同じなんだ

みんな同じなんだ

気づいてほしいのは君だけじゃない

一人ぼっちに感じるのは君だけじゃない

愛されたいと叫ぶのは

君だけじゃない

私も愛されたいし

みんなも愛されたいんだ

自分から

深い深い海に足を踏み入れることなんかしないでいいよ  
青い空が君を待っているから

## 偽りと真実の中で（前書き）

大分前に書いた詩、です。自分の中に、小さな葛藤がありました。

## 偽りと真実の中で

誰からも好かれたくて

嘘でもいいから笑ってなければと思ってた。

嘘はきらいだ。

正直が1番だ。

矛盾する心と体。

結局誰かを傷つけてしまう。

私は馬鹿で馬鹿で、

どうしようもない馬鹿で

何が1番大事かもわからない。

決められない。

大事だった、と後々に知る。

優柔不断な人間です。

いくつもの後悔を悩み、悔やみ、無意味に泣き

今日もまた、追憶を奏でる。

淋しく暗い愛の歌を。

日向があるから日陰ができる。

お日様が強く輝くほど、日陰は暗くなっていく。

その二つが一人の人に住み着くから私達は悩む。

そう、悩むのが当たり前。良いこと、悪いことの繰り返し。

人はそんな中をさ迷ってる。嘘の仮面を常に持って。

”ウソ” なしじゃ私達は壊れてしまうから。”素直” なしじゃキレイに笑えないけれど。

笑いたいな、

そんな風に。

「笑おうよ」

ほら

風が踊るよ、葉をのせて

青い空はすべてを受け入れるって

笑ってる。

緑の木々は背中押してるよ。

”がんばれ” って。

手を広げて世界を感じよう。

手の隙間をすり抜ける風に、体全体で当たってこよう。

高いソラに手を浸して

心の底から

わらえ、わらえ。

絶えず流れてゆく時間を

たくさんのもので飾っていききたいんだ。

## お日様が顔を出す頃（前書き）

冬の朝は、なんだか綺麗な心持ちになるな—と思いました。  
…寒いですが。

## お日様が顔を出す頃

遠くの方で

ヒカリダマ一つ

顔出した

ひんやりと澄んだ空気で

目が覚める

吐く息は白くて

いつの間にか消えてゆく

ああ

この静寂を音で響かせたい

ああ

体中を刺すこの冷たさを

いつまでも感じていたい

立ちすくむ私を包み込む光がとても温かいな

雲の隙間から零れる天使の梯子

蜂蜜色の柔らかな色を見つめて

ひとり、泣いていた

あの子に

今の私なら

”大丈夫だよ” って

言えるかな

なんてふと思ったたりして

あんまり綺麗なものだから  
悲しくもないのに  
涙が零れた



## 人間論（前書き）

忙しい心の内を、  
何となく眺めてみた。

今日は、昨日読んだ本のせいで少し、ザワザワしております…。

## 人間論

喜怒哀楽の感情が

入れ替わり立ち替わりで

私の心を駆け巡る。

それは常にと言っているほど

人の言葉によるもので

良いように思っているのか

悪いように思っているのか

私自身には全然わかりません。

嬉しさのあまり涙を流し

怒りのあまり人を傷つけ

悲しみのあまり絶望すら抱く。そして楽しさによって

人は幸せなのだと言う。

” 幸せな時間 ” のあとは

どうにも物悲しくてなりません。

人はいつだって

傷付くのを恐れ

幸せを欲する。

当然のことなのでしょう。

人は結局

弱い生き物だから。

私も人間。

だから今日も笑い、幸せを感じ、誰かの言葉で不快な気分になります。

ただ、無意味な涙だけは流さぬように生きていく、と自分自身に誓ったのです。

## 名もなきウタ（前書き）

いつかの小話のシリーズ、です。

## 名もなきウタ

ある病室で

少年と少女は出会いました。

外はザーッと雨が降っていて、

時計はPM3…26をさしていました。

少女は歌を歌い、

少年はそれを聞いて涙を流しました。

そして少女はソラに還った。

二人はもう、

会うことはありません。

しかし、

少年は少女の歌を

少女は少年の涙を

忘れることはないでしょう。

He'll never forget her song.

She'll never forget his tears.

It's forever.

## ヌクモリ（前書き）

一人一人、体が別々なのは多分、孤独になるためじゃないよなあ、  
って  
思いました。

## ヌクモリ

右手に残る温もりは

いつ、誰のものだったのかな。  
ずっとずっと、

誰かが繋いでくれていたのに。

隣にいるのは冷たい風。

スキップ踏んで舞い踊った。

―上手く生けない私を笑ってる？

東西南北 書かれた地図。

握り締めすぎて、もうクシャクシャ。

もう、いつそのこと捨ててしまおうか？

地図なんてただの紙切れでしょう？

私は一人だけど

孤独ではないもの。

―大丈夫。

君の声が聞こえるんだ。

この温もりが消えても

決して消えないものがココにあるから。

**僕が天使だったとき（前書き）**

あの日のわたし、  
あの日のあなた。

## 僕が天使だったとき

薄っぺらなアルバム帳。

いくつもの写真たちがそこにはいた。

あの頃僕は

何を思い、笑ったの？

みんなはなにを抱き、

そばにいてくれたの？

笑顔で写る、僕等のうしろへ

僕は記憶に想いを馳せていた。

背後へ…

まだ若き僕ですら

5歳児であつたときが

純粹に輝いていたなと思える。

ほんの数個の感情。

あの頃は

複雑な感情なんか何もなくて

日々の一つ一つが本当に楽しかった。

鳥みたいに人も飛べるはずだって

信じてた。

明日がくるのが待ちきれなかった。

あの頃僕だって

天使みたいに笑えていたんだ。



**夢愛―悲しみの果てにいる少女（前書き）**

今頭の中にある、物語の断片です。

## 夢愛―悲しみの果てにいる少女

「物足りないのでしょうか？」

この退屈だらけの世の中が。騒音の鳴り響く世の中が。名も知れぬ何かを、ずっと探し求めている。

ねえ。

君の探しているものがここにあるかも……って言ったら、どうする？」

荒地のように寂しくて乾いている少年に、

私は思わずそう言った。

オレンジ色に染められた髪はすごく綺麗だと思ったけど、口には出さなかった。

少年は私に威嚇している。……何故？

ああ、そうか。

君の心の内を見てしまえる私が、気持ち悪いのね。

恐ろしいのね。

わかった。

みんなそう感じてたしね。だからお客が来ないのだけど。

それにしても、最近の世の中って一体どうなっているのだろう。

人間たちは下を向かずに前を歩いているけれど、どこか機械的。

仮面のように笑って、相手のご機嫌とり。

常に闇に怯えてる。

空の蒼さに、

子供の純粹さに、

疲れたの？

一人＝孤独だなんてありもしない方程式作って

何がしたいんだろう。

誰かを疎外して笑うなんてくだらないこととして、

それでもなお、自分の場所だけは、と無我夢中で手を伸ばすのだ。

”おかしい”と気づく人はいるはずでしょう？

なのに、それが常識となりつつ今、騒音ばかりの世の中で小さな孤独の声がいっぱい聞こえてるの。

そして、ある日突然ぷつりと一つ、もう一つと消えていくのだけれど、

決して減らない。

消えた瞬間にまた孤独が生まれるから。

この世から、淋しさとか虚しさとか負の感情が消えることはまずないにせよ、

私はこの薬屋に居続ける。居続けて救うことが私の存在意義。

そのためだけにココにいる。

他人の淋しさをこれからも背負い続けるしか居る意味はない。

……君はこの世界をどう見てる？……

夕焼け色の少年に思いを馳せる。

諦めはしようがないと思っっている彼の目は決して死んじやいなかったのが不思議で。

## 水玉物語（前書き）

短編恋物語、です。

最近幸せに終わるお話が書きたくなったので。

## 水玉物語

その日は、窓からの風が気持ちよくて時間がゆっくり穏やかに流れていた。

「こら。起きなさい！」

背後から溜息混じりの女の子の声が……と、ぼんやりした意識の中で何と無く感じ取った。

ただ、その声が自分へと向けられていることには中々気づかなかった。

それから、自分が今、

どこにいるのかということも。

「う————…」

ふわふわした感覚のまま、目を覚ます———と思ったけどやっぱムリ…

そうやって

もう一度眠りに着こうとしたとき。

「お・き・ろっ!!」

部長ってば!

おきろ——っ」さっきと同じ声。

幼気の混じった可愛い声。

なんだか妹に起こされている感じがして、

僕は苦笑しながら薄目を開けた。声と見合った、小さくて細っこい女の子がそばにいた。

桜色の唇をほんの少し尖らせている。

微かな春の匂いが、絵の具や筆や、様々な画材の匂いと共に鼻をくすぐった。

僕がよく知る、同級生の女の子。

「ははは。おはよ。」

彼女の顔を見ると、安心してなんだか笑えてきてしまう。

「部活の時間ですよ。

寝ちゃだめです。」

くると後ろを向いてしまった。

猫の尻尾みたいな、二本のお下げが少しだけ跳ねる。そのまま去ってしまいそうな彼女の細い腕を、優しく掴む。

「……だめ。敬語禁止!」

やんわりと笑ってみせると、驚いたように瞳をまあるくする。

「う……わかりました。」

眉間に皺を寄せ、頬をうっすら染める。

そんな一つ一つの動作が可愛くて、自然と口元が綻んでしまう。

僕と彼女の二人だけの部室に、幸せ色の風が吹き抜けた。

「結衣、」

その風にそっと乗せるように彼女の名前を呼ぶ。

「好き。」

部室に小さく小さく響いた、たった二文字の言葉。

君に届け。

世界一大切な人、

僕はあなたが大好きです。

## 暁のソラ（前書き）

あの日の夢。

まっすぐに思い続けた、  
幼い私に戻れたなら、

## 暁のソラ

歳を重ねるほど

可能なモノが増えていくと信じたあの頃。

鮮やかな色彩しか目に映らなかった。

綺麗なものはキレイだと

素直に褒めたたえることだってできた。

スキップして進む方法すら忘れてしまった。

代わりに学んだのは

嘘のつき方と逃げる方法。

今では本当に上手になった。

退化としか言えぬ成長。

虚しい歌をBGMに

先導されるがままに歩みを紡ぐ。

ダレカが作ったコンクリートロード。

転ぶことすら怖がる人の

冷たき安全な道なんだろう。

痛みを知らないことが幸せなんて思わない。

”痛みを知ることでは人は強くなれる”

”痛みを知ることでは人は他人を思いやれる”

そう教えてくれた我が師。

——忘れません。

弱い僕。

やっとのことで決意表明。

笑われたって構いやしないさ。

むしろ微笑み返してやるよ。

この手いっぱい色彩で



我が道を描いてみせるから。

## **J u s t (前書き)**

詩です。

”カッコイイ” 詩とゆーものを目指してみました。

## Just

未練がましい太陽

じりじりと落ちてく。

諦め悪いな。

空はこんなにもお前色で染まってるのに。

まだ何か足りないの？

いくらあんだでも時間は止めらんない。

今日は終わって明日へ続く。

何もできずに今日は終わる。

モノクロームワールド

誰がそうさせたのかは皆知ってる。

乾ききった人間のせいさ。

とれよ、仮面。

俺の顔を、目を、生き様見ろ。

目、眩むなら、それだけ世界は色鮮やかだってこと。目、背けたら

またモノクロームワールドへ

”Down”

”Wake up!!!” 起きろ

もう目覚めの朝だ。

終わりと始まりは常に背中合わせ。

時は待っちゃくれねえ。

加速せずとも、止まりやしない。

我が名を誇れ。

我が身を張れ。

威風堂々

誰もが個性を宝とせよ。

## 思い出のカケラ（前書き）

未来に希望を持つ反面、

過ぎてゆく時間が恋しくなります。

どうやら、後ろを振り返らずには生きていけないようです。私は。

## 思い出のカケラ

本当に欲しいものは  
高価なバッグでも  
高級な料理でも  
素敵な洋服でめなく、  
穏やかでやさしい、  
懐かしい時間。

おばあちゃんがくれた  
あのカリントウの味。  
おじいちゃんがくれた  
甘い甘い、チョコレート  
の味。

愛がてんこもりの  
あの  
ごはんの味。

当たり前に手にしていた  
” あんなもの ”  
” こんなもの ”

時間の流れのなかで  
いつかはなくなって  
思い出せなくなるのかな。  
15歳で死んでしまった  
あの子さえも：

——いやだな、

——いやだよ。

忘れたくない。

だいすきな

思い出のカケラ。

**想うは貴方、漆黒にシズム（前書き）**

ちよつとした小話。

過去、少年を助けた黒い女。助けてもらった少年。  
少年の視点からのオハナシ。



## 想うは貴方、漆黒にシズム

「私はもう、ダレカのために生きるって決まってるから。死ねない。」

黒髪に黒のスカート。

風に靡かせ女は泣いた。

そのカナシミは深く

深く、

誰にも触られないほど

奥に。

人の孤独を癒すためだけに存在する彼女は

”幸せ” というものの温かさを知っているだろうか。

どうしてそんなに

哀しそうに泣くのですか。

——ひとりで。

闇の中、

淋しさに震えて。

細い彼女の手首。

気づいてる？

俺がココにいるってこと。

あなたが癒してくれた傷だらけの少年は

こんなに生きていますよ。

貴方は、

気づいていますか……？

## 忘れられない優しい歌（前書き）

とても好きな歌がある。

” 生きろ ”

言われるだけで

こんなにも生きようって思えること、知らなかった。

## 忘れられない優しい歌

心のでっかくて深い  
孤独の穴があった。

生きているのが辛くなったら

自らその穴に潜り、

一人ぼっちになる。

漆黒の熱くて痛い闇。

怒鳴り声すら

聞こえない世界。

温もりは何処？

優しさは何処？

泣きながら手を伸ばす。

虚しく空中を切るだけ。

膝を抱えて愛を待つ。

待っていても

愛は来るはずなのに。

午前零時。

息を殺して泣く僕を

包んでくれる人はいなくて。

耳を塞いで寝るしかなかった。

吸い込む酸素が

吐き出す二酸化炭素が

震える。

こんな自分

生きることが許されていていいんだろうか。

答える者はいない。

でも

死にたいと思ったとき

聞こえたのは

生きてくれと愛を歌った

ひとりの歌い人。

## 人混み（前書き）

賑やかなのに  
胸がすいてゆく。  
その虚しさの詩です。

## 人混み

サーーーーーーッと

穏やかに、伸びやかに

瞬きの間

時は通り雨みたいに過ぎてゆく。

流行で飾り付けられた人たちが

目の前をカナシク

胸を張って歩いてた。

泣きたいのをじっと我慢して

涙を零してしまわないように、歯を食いしばってた。

下に人がいることが唯一の救い。

上に人がいることが数多くの苦痛の一つ。

虚栄や嘘で塗り固められた僕が

一人の言葉で粉々に碎ける。

この悲痛な叫びも

誰からも無視されて、

なかったことになるのかなあ。

## 罪深きひと。(前書き)

あるニュースを見たとき

この詩を書きました。

随分前ですが、私にとっては衝撃的で。  
今もまだ、忘れていません。

## 罪深きひと。

一人の少年は無言で死んだ。

最後にかけてた母親への電話も、繋がることはなく、  
今残ったのは悲痛な泣き声だけ。

アパートの屋上から

鳥のように飛んで

死んでしまった。

コンクリートに広がったアカは、時の流れがじきに消してしまうの  
でしょう。

少年の存在は

一体なんだったの……？

たった13歳

中学1年生の彼を

誰が死まで追い詰めたの？死ななきゃだめだった？

——あなたのせいですよ。

指をさして示さなければ

あなたは自覚しないのですね、犯罪者。



君、貴方、そして彼等と。(前書き)

楽しいことだけじゃないから、辛い。  
だげに進みたい。

君、貴方、そして彼等と。

悲しみを幾つ乗り越えたとしても、きっと、その先に悩みの一つもない人生はないんだろうな。

いつまでたっても悩みは尽きない。

人が他人と関わるのをやめない限りは。

心を痛めずに、トモダチなんかできないよ。

心から、誰かを信じたいのなら、もう、自分から傷つこう。

上手い言葉が出てこないのなら、抱きしめよう。

心臓の脈打つ音が

ね、聞こえるでしょう？

あなたにしかできないことがあって。

私にしかできないことがあって。

尊敬が癖みに

愛情が憎しみに

変わってしまうこの世界を

愛してみれるかな。

愛したいよ。

愛してみせるさ、

君となら。

## つぶやき(前書き)

私に何ができるだろう。

## つぶやき

この両手で何ができるだろう。

他人の悲しみをガッチリ受け止められるほど、大きくないこの手。

自分の涙しか拭ったことのない、弱虫な手。  
泣きそうな顔するあの子の、小さな体さえ  
ぎゅっと抱きしめてあげられない。

周りから「君は優しい」とか言われたって  
そんなバカな。

これほどまでに冷たい人間はいません。

口があるのに上手い言葉も出てこない。

喋れないくせに、行動も起こせない。

何にもない。ない。ない。できない。

やらない。

消えたい。

でも生きたい。

自分が大事かい？

ううん、別に。

だったらせめて、

他人を大事にしたいもんだ。

## 海のお姫様（前書き）

海の底、煌めく碧に、  
ひとりの人魚の、お姫様。

## 海のお姫様

昔むかしの人魚姫は

どんだけ王子様が好きだったんだろう。

自分は泡になって消えちゃうのに。

自分を犠牲にしても。

王子様は

人魚姫を好きになることなんてないのに。

海に帰れる刀をおいた、

彼女の心の内は

王子を想う愛だったのか

それとも彼女なりの優しさ、もしくは正義だったのか…

彼女の選んだ道が正しいなんて

私は思えないけれど、

おそらく、

消える間際まで純粋な心を持ち続けた人魚姫は

とても美しいひとだった、と

私はそう思うのです。

## ソライロ？（前書き）

感覚で書く、こと。

つまり、無意識にイメージして出てきた言葉を並べただけの、一見  
謎な詩です。

## ソライロ？

まんまる      君の目  
うつったラムネビー玉。

シアワセの泡詰め込んだんだもん。  
ねえ、キレイでしょ？

グリッター塗りたくらんでも、こんなにも、  
こんなにも……………

きらきら輝くその瞳で、  
いくらでも「ユメ」は見られるの。

甘くも、すっぱくも、  
苦くもなれる。

過去にはもう戻れないわ。  
だけど、だからこそ、こんなに愛おしいの。

眺めては触れ、  
割ろうとしては、止めるのはいつも自分。

純粹だったあのころ。  
”ソライロビー玉”。



オレンジイロ？（前書き）

恋のうた。

……です。

## オレンジイロ？

空がほんのり色付いて

お日様が帰ってくこの時間。

貴方と二人。

あの小さな丘の下で伝えた、小さな、

小さな告白。

ユメの中の徒競走みたい。

上手く言葉が出てこなくて、歯痒さを噛み締めた。

一度は手を離そうとしたものだった。

もしかしたら、一度は既にくずかごに投げ捨てたものだったのかも  
しれない。

新たな光に照らされれば

もう、

言葉なしで手を振れると思ってたんだよ。

サクラの記憶がそう言ってる。

”壊れてくものがコワイ”と。

それでも僕は

先のわからない闇を

眩しい朝を

ありのままの僕で

泣いて、笑って、怒って、また泣いて、  
生きていく。

人は人を愛すから、

どれだけ頬を悲しみが伝おうと、枯れないのでしょうか。

愛する人の笑顔一つで

また歩き出せる。

「単純だね」って皮肉る言葉さえ、微笑み返して。

「消えたい」って哀願する自分さえ、蹴り飛ばす。

蹴り飛ばしてみせるよ。

まっすぐな言葉。

貴方に送る。

お日様が帰ってく、

その前に。

嘘一つないこの想いが

届くように。

強い風に流されないように。

今はまだ、泣かないように。

貴方がすきと、

伝えるまでは。

レモンイロ？（前書き）

「僕」目線の恋、です。

## レモンイロ？

綺麗な心のままで誰かを愛せたなら、僕はどれだけ多くの人を愛せたかな。

君ひとりをこんなにも愛すること、できたかな。心傷付けて、

やっと一人の人を愛しく思えたんだよ。

枯れるんじゃないか、つてくらい

カナシミ流して、

汚い感情いくつも持った。

でも、

冷たい雨に濡れて

風邪を引きそうな僕に、

温もりをくれるのも君で。

どうやら嫌いにはなれそうもないや。

悔しいな。

そう言って、

僕はいつも降参する。

やっぱり

あなたが大好きです。

## ソラと想羅（前書き）

ある二人の少年のオハナシ。

私情ですが、近くにいても肝心なことは何も言えない” トモダチ”  
間に、少々寂しくなってしまうって。  
それのできた話です。

## ソラと想羅

「つまんなかったんだ。  
普通に生きてるだけなんて。」

青い空の下で彼は呟く。

何処を見ているのか知ることできず、  
自分は突っ立っているだけ。

”イマサラ”だと、  
どこかで自分を嘲笑う。  
無力だなあ。

栗色の柔らかそうな髪が  
風に玩ばれてワルツを踊る。

お前は悲しいのか、なんてきけない。

俺の言葉でお前は  
簡単に飛んで行ってしまいそうだから。

「ねえ、理久。

シアワセとフシアワセの境界線は、何処にあるんだろーね」

いつも。

いつもお前は、そうやって答えを求めようなんて  
考えてもないくせに聞いてくる。

変な質問ばかり。

本当はその問いの答えを知りたいんだろ？

「……………っ、」

喉が詰まって声が出ない。頭が痛い。  
息が苦しい。

あいつの姿も

今じゃ世界がボヤけて

真っ白な鳥みたいに見えた。

――風が、吹く。

一瞬視界が元に戻ったと思ったのに、また歪む。

「理久」

名前を呼ばれたのに、  
向き合うこともできなかった。

「泣いてるの？」

少し驚いたようなアイツの声。

風が止み、寂しく空気を

震わせた。

自分のつま先をじつ、と

見つめたまま

溢れた感情を頭で処理しようとしていたが

どうやら無駄のようだ。

まっすぐアイツを見る。

微かに目を見開いたように見えたが、気のせいかもしれない。

ふっと口元を緩めたのは

気のせいじゃないから。

「やさしーね、理久は」



カナシイくらい  
にっこり笑う。  
その力の源は一体どこにあるのだろう。

## 15歳（前書き）

自分が15歳最後に書いた詩です。

：ちよつと殺伐とした感じがいたします。

## 15歳

鳴り響くは

人々の雑音か

それとも獣の唸り声か

美しい音色を捜し求める子供はうなだれる

モノクローム

無き色彩

何処へやった？

空さえ灰色に濁る

走っても走っても

終わりは見えず

泣いても泣いても

涙は乾かず

このままじゃ僕等、

消えてしまいうそで…忙しなく溢れる孤独

”愛してよ”と叫ぶにも

肺活量が足りない

90%空気の声が虚しく宙を伝っただけ

ああ、こんなにも叫んでいるのに

傍観者の耳には届かないな

こんなにも　こんなにも

苦しいのに

自分と他人の壁はやっぱり越えられないのだろうか？

いや違う

そう、壁なんて最初からなかったんだ。

見えていたのは幻の地獄

見えていなかったのはありのままの貴方

見すぎていたのは傷付けられた可哀相な僕

見ようとしなかったのはダレカを傷付けた弱虫な僕だ

「傷ついているのは僕だけじゃない」

その言葉に救われたのに

自分ばかりが傷ついているみたいな

被害者気取りで言葉を綴ってきた

情けない

生きている限り

人を傷つけずに日々を過ごすことは無理だ

生きること

それはだれかを傷つけること

だれかに傷つけられること

哀しいこと

嬉しいこと

恐ろしいこと

人を愛すること

愛されること

うまくいかないこと

繰り返すこと

泣きたくなること

強くなりたいけど

強くなれないこと

永遠に

サヨナラを言うこと

一緒に生きていくこと

愛する愛されないの連鎖

永遠かと思われる螺旋階段

果てにあるのは

光か闇か

小さな勇気一つ携えて  
臆病な右足を踏み出す

## 前向き自転車（前書き）

多分、中学生のときに書いたものです。  
すごく明るい、ポジティブな…（笑）

## 前向き自転車

進め

光が差し込むあの場所へ

突っ走れ

大声で歌を歌いながら

ともかくにも生きるしかない

全速力で駆け抜けろ

一瞬一秒を死ぬ気で

風が欲しけりゃ自分で作るさ

永遠なんてない

だからこそそのタカラモノ

ブツブツ世界の悪口言ってる暇があんなら

七色の絵の具で夢を描こう

明るく楽しい夢を

馬鹿にされたって構わない

孤独にだって打ち勝ってやる

壁なんて知らない

まだ知らなくていい

青春と言われるこの時が

僕等の希望へと続きますように

今はただ

ガムシヤラに走るしか能のない子供だから

## アカイロ？（前書き）

イロシリーズ（？）、再び。テーマの色決めて書くと、楽しいです？



## アカイロ？

また今日も朝がきて

眠たい両目を擦りながら体を起こす。

夢からの脱走

なんとも言えない疲労。

抜け出したとたん現形を無くす。

掴み損ねた記憶は

煙みたく消えてしまった。

幸せでも色褪せるんだ。

気合いで定着させないと。

まわる思考回路。

スタートしたものの

ゴールはどこにある？

目指すべきものも不確かなのに幸福の地なんてほど遠い。

自分がわからないのに

他人なんてわかるハズもない。だろ？

いつだって物分かりのいい優しい自分なんて作り物さ。

「君って優しいよね」

それは誰のことですか？

交わす言葉と心。

ぶつかるのが怖い。

だから作り笑いでごまかすんだ。

嫌われたくないあまりに。

いいよ、笑って。これが僕だから。

ありのままの僕だから。

日が沈んでいく。

あなたの赤は最後の悪あがきですか。

神の一作品としての哀れみですか。

この涙の本当さえ

僕は知らない。

知りたくない。知りたい。知っても意味ない？

絡める指先に愛があるのかな。

抱きしめ合ったら満たされるの？

足掻き続ける僕に幸せをください。

じゃないとへこたれそうです。

愛するだけじゃ足りなくて。

あなたの赤は最後の悪あがきですか。

神の一作品としての哀れみですか。

この涙の本当さえ

僕は知らない。

知りたくない。知りたい。知っても意味ない？

前をゆけ。まだ泣くな。

堪えることも勇気でしよう？

死にたいって言うな。

君の存在、時に刻め。

ヒール靴脱ぎ捨てて

裸の足で大地を歩こう。

風も涙も背中にしよって

花のように笑うから

人生は幸せであるよう、

あなたも笑って。

転がる石のように生きるから

あなたも生きて。

生きてください。  
どうしても。  
どうしても。

## ユメ（前書き）

気づいたら目を閉じてしまっていた。  
世界はもっと、際限なく広がってるのに。

## ユメ

眉をしかめて歩いてたから世界はどことなく陰って見えた。  
温もりに甘えて

ぎこちなく階段を上がる。

それが弱さだなんて

誰も教えてくれなかった。安定だと言われる生活の中にすっぱり入れられ

本当の自分が不機嫌そうに口を尖らせる。”正しいと普通はイコ―ルで繋がっているの？”

浮かんでは消えるシャボン玉。

七色の風船はダレカじゃなく、自分で割った。

諦めるために膨らました夢じゃないんですよ。

不幸になるために生きていくんじゃないですよ。

大人が笑った

僕等のユメ。

まだまだ創作途中。

取り上げないで、と泣き叫ぶ。

玩具を取り上げられる子供のように。

もし、

この夢が叶う時には

一人でもいい。

笑ってほしいな。

**対ノ愛、対ノウタ（前書き）**

対の愛、対のウタ。

キミに

アナタに 届いて、と。

## 対ノ愛、対ノウタ

凍える指サキ。

触れる、アナタに。

とっても寒いのに。

困った顔して、

ニゲナイデ。

近寄って、触れて。

あっためて。私を。

ねえ、寒いよ。

温もりを、その手を、

その愛を。

全部ちょうだい。

好きなの。

\*\*\*\*\*

凍えた指サキ。

触れる、キミに。

ああ、寒いね。

泣きそうな顔して、

怯えないで。

肩を抱き寄せ、

ぎゅっ、とする。

僕の熱を奪って。

一人、凍えないでよ。

温もりも、この手も、

この愛も。

全部あげる。

好きだよ、大好きだ。



## アオイロ？（前書き）

胸につたう、冷たいアオの水。  
鳴き続ける心は  
いつも何かを求めて手を伸ばす。

## アオイロ？

月が

音もなく零す碧い涙のように、無類の美しさに憧れて  
キレイなものをこの手で作り出そうとした。

いつだって同じ。

繰り返す。

出来上がるは、小汚い作品ばかり。

―どうしろってんだ。

声にすらならぬ、この叫びはいつまでも鳴き続ける。

泣いているわけじゃない。慰めないで。

脳裏を横切る、

幼き天使がくしゃりと笑った。

その白い羽は

どんなにソラを焦がれても、もう、飛べないのに。

穢れてしまったのよ、私。戻れない、

戻らない……………

## 狂（前書き）

正しい生き方を目指す。

「それで幸せになれるのか」と聞かれると、そうでもないと思うけどそれでも正しくありたいと思うてしまう。

## 狂

何が正しいのか？

何が間違っているのか？

何が正常で、

何が狂っているのか？

私が正しいのか？

私が狂っているのか？

キミが正常なのか？

キミが間違っているのか？

もう、もうワカラナイ。

何が良くて何が悪いのか、もうわからない。

もしかしたら、

この世界には正しいものなんて一つもないんじゃないか、

もしかしたら、

異常こそが正常なんじゃないか……………？

途方に暮れて、空を見上げる。

碧い、青い、アナタ。

貴方はいつも

正常ですか。

## 寂しい僕（前書き）

事あるごとに死にたいと言う。  
死にたいなんて、微塵も思っていないくせして。

## 寂しい僕

先が見えなくて  
死にたいと言う。

健康なくせして、

「もっと」と何かを強く求めて、

手に入らないと

もう疲れた、って

立ち止まる。

だけど、自分を追い越してく人たち見て、

焦って、寂しくなって、

また僕等は歩きはじめる。

孤独からの解放はひとりぼっちでしかない気がする。

ダレカと一緒に生きること慣れてしまったから、

寂しがりやになったのかな。

” いいんじゃない？それで。”

カミサマが頭上で言いました。

いや、そう言ったのは

僕の隣を歩く君だったかな。

## いのり(前書き)

僕、の視点から  
恋の詩。

## いのり

きみの心にあるその闇は、僕の心にあるコレとどこか似ている。  
不謹慎ではあるけれど、

きみの涙も

きみの痛みも

きみの幸せも

100%わかるなんて到底思えないですが、  
10%、いや、1%ぐらいかな。  
それくらいならわかる気がして。

「僕に全てをさらけ出して」とまでは言えないよ。  
「そんなの綺麗事でしょ」　ってきみは笑うだろう？

僕も笑っちゃうよ。

僕ときみは別々の個体なんだから。

親も好みも生まれた場所も違う。

共通なものを数えたって、まだまだ指は余ってる。

きみはきみで

僕は僕。

誰がなんと言おうと変えられない真実。  
だけど願ってしまうんだ。

この星に、月に、神様に。

きみの好きと僕の好きが同じであるようにと。



## 木枯らしの別れ（前書き）

あるお話の最後をイメージしました。

寂しいのを胸にぐっ、と詰めて、手を振らなければいけない。そんな時が私にもありました。

## 木枯らしの別れ

「さよなら」が近づいていることは、なんとなくわかっていた。

この男は、夏が終われば私の元を去ると、  
心の何処かで思っていたから。

根拠はない。

けれど、風が冷たくなるにつれてあの人は少し、  
寂しそうな顔をしたから。だから………

紅い紅葉吹雪の中、

大きく、大きく

手を振ります。

” さようなら ”

” さようなら ”

口に出すと消えてしまいそうだから、

ひたすら胸の内で響かせるだけにします。

何度も、何度も。

” あなたを決して忘れません ”

私はあの時以来、初めて声を上げて泣いた。

男の細い背中

アカに紛れて

いつの間にか、視界から消えていたのだった。

## ふぁいんど（前書き）

作り笑顔で得たモノが、本物であるはずない。

心底わかり合えるはずない。

それにもかかわらず、私は相手にホンモノを求める、愚か者だ。

## ふぁいんど

気づいてしまった。

人と関わるのに体力、気力をひどく消耗してること。

気づいてしまった。

誰も本心で誰かと接してるわけじゃないこと。

少なからず、壁というものがあって、乗り越えるのはとてもとても難しい。

想えば想うほど足は一步も動かなくなる。

容易じゃない。

近づきたいのに遠くなってく。

気がつけば、遠ざけてるは自分のほう。

愛せないのは私のほう。

ほら、今日も。

相手のココロの底覗こうとして、一生懸命笑ってる。好かれようと必死に。

ワラエル。

そんなんじや好かれないうってわかってるのにね。

## 恋文（前書き）

さよなら

と

はじめまして

別れ

と

出会い

どこか虚しいこの季節。

## 恋文

いつだったか

私はある男の子をすきになったことがある。

甘く、淡く

始まりも終わりもわからないもので

恋だったのか、と聞かれると少し自信がない。

ラムネソーダの瓶に

ころんと入っている透明なビー玉と同じ輝きを持つその記憶は、  
年を重ねれば重ねるほど

美しさを増してゆく。

素敵な物語の1ページ。

繰り返し想い浮かべ、

現実には打ち消される。

でも消えない。

消えて欲しくないから。

記憶を廻る旅に出掛けると、いつも出会うのは  
ほろ苦く、それでいて哀しい思い出のカケラ。

楽しい光のものばかりじゃない。

これも消えない。

本当は消えて欲しくないから。

今の自分はこうなったのかな。

旅の途中、草原に足を放り出して考える。

人と触れ合うことの演技。男子への緊張。

いつの間にか怖くなって震えてた。

だから、今此処にある想いは  
恋と呼んでいいのか

わからないけど、そうだいいなと思う。

君と話せるだけで

私はとても幸せな気持ちになれるから。

手を伸ばして、

君の輝きをずっと感じていたいな。

冬が過ぎ、春が来ようとしている今日この頃。

春、どうか来ないで。

別れの季節が来ようとしている。

この想いは強く深く深くなってしまった。

二人それぞれの道を歩き出してしまったら  
もう

会えることはないでしょうね。

朝のヒカリ／アオイソラ（前書き）

二つの詩を入れました。

テーマは…”ハカナイもの”…かな？



## 朝のヒカリ／アオイソラ

遠くの方でヒカリ玉一つ  
顔出した。

空気は冷たく澄み渡って  
ふいに吹く風が  
鋭く体中を刺す。

いつか、いつか  
この風が優しいものになるのだろうか。  
ならば私も  
変わればいいのに。

\*\*\*\*\*

### アオイソラ

晴天、吹き抜ける風、  
楽しそうに踊るヒカリたち。  
人はきつと信じてる。  
この空が永遠のものだと。  
唯一の永遠なのだと。

心から大切だと思えるのは  
失ってしまってから。  
失ってやっと、大切だったって気づくの。

いつも傍にいる人が  
いつかはいなくなるんだと思うと、  
未来に憎しみすら抱くけれど  
誰にでも公平な時間は

所詮、止まりやしないんだ。

雨上がりの空、

何十分も架かる虹、

人は綺麗だと言うのか。

果敢無いモノこそ美しい。

頭上に広がるソラよ。

貴方は正直だ。

一つ聞こう。

「人間は輝いていますか」

## 空の顔はキミの心／歩（前書き）

短い詩、パート2です？

しばらくこんな感じかもです。（今現在、端的にしか言葉が出てこなくて）

楽しんでくださると嬉しいです。

## 空の顔はキミの心／歩

空の顔はキミの心

見上げれば

今にも泣き出してしまいそうな曇り空。

この同じ空の下で

誰かが泣いている気がした。

私は誰かの力になりたいよ。

助けたいよ。

自分すら悲しませてしまう私だけけれど。

すごく、かなしかったから。

\*\*\*\*\*

歩

大人ぶったって上手くいくわけじゃない。

子供が見栄張ってぶかぶかの靴を履くみたいに。

無理したってね、

背伸びしたってね、

他のダレカにはなれないし

うまく歩いて行けない。

行き先は光、人は歩いてく／前進（前書き）

テーマ…前向き

## 行き先は光、人は歩いてく／前進

行き先は光、人は歩いてく

つぶっていた目を開けて

塞いでいた耳から手を離して

下ばかり向いていた顔を上げて

止まっていた足を動かして

光に向かって歩きだそう

ただひたすらに

前を向いて

この目で

この耳で

この顔で

この足で

生きてゆきます

これからも、

\*\*\*\*\*

### 前進

進める道はたった一つじゃない

だから たくさん寄り道したっていい

時間はかかるけど

得られるものはたくさんだ

大丈夫

進もう

ロードランナー／無題（前書き）

臆病を携えて  
足を踏み出せ。



## ロードランナー／無題

ロードランナー

我慢ばっかなんて耐えられないだろう？

臆せず、

自身の力と希望を信じて進むだけ。

無理だとか

不向きだとか

よく言葉で吐き出すけど

思えばこれは言い訳だ。

無理だと言って逃げたり

向いてないと言ってやらない。

もうやめにしようや。

どうなるかなんてわからない。

予測不可能

常にチャレンジャー

「上等だ」と呟き足を前に

さあ、道は開けた。

思いのままに突っ走れ。

\*\*\*\*\*

絶望や悲しみの果てにあったのは一つのトビウ。  
なにかが変わろうとしてた。

生物に変わらぬものなんてないから

生きるたびに多くを学び

多くのものに触れ

複雑になっていく。

光の中に生まれ

闇に溺れ

そしてまた

新たな光へはい上がる。

## ヒトヒラの言の葉（前書き）

詩未満のもの集、です。

## ヒトヒラの言の葉

飾らずにいけ。

ありのままの君で。

何回転んだって

それでも負けたくなくて

泣かないんだ。

触れ合いの中でしか

手に入らないものだってある。

生きていれば

それでいいから。

一体何人の人達に助けられてきたんだろう。  
きっと、一人じゃここまでこれなかったね。

私達が前に進めるように

太陽はさんさんと光を浴びせていたんだ。

ただ、ただ生きていきます。  
みんなと共に。

## クロシロ（前書き）

痛いのと、悲しいのと。

## クロシロ

薄墨の空　湿った空気が  
僕の頭を俯かせています。

後ろめたいことは無かった筈なのに  
どうして僕は唇噛むの。

指の皮、引き裂いて  
流れるシズクを見つめる無感動。  
痛い、痛い。

感覚神経がそう言って泣くけれど。  
ここんところ、どうにも刺激に鈍いみたいだ。  
悲しむべき場面からだいぶ遅れて涙は零れる。

夢の中で笑ったあの人たちの  
顔も思い出せぬまま

行き先は何処かと、  
愛してくれないかと、

震えながらも口にすればよかった。

今がとても辛いのは、  
だって、  
そのせいでしょ。

## 海の底の焦燥

何かやらなくては、と心では分かっているし、焦ってさえいるというのに、

身体が少しも動かないとは何事だ。

自分を自分で叱る。

叱ったって解決できるとも思わないけど。

どうせ、

いくら自分を責めたって

「私」は全然変わろうなんて思わないもの。

だって、変わるのは一苦労だから。

心が疲れるから。

つまり面倒臭いのだ、私は。全てにおいて

最後は自分に帰ってくる。

それにもかかわらず

自分から何かを始めようとしない。

他人から言われて、ようやく「やらなくては」と動く。

それではダメなのに。

何故できない。何故動かない。何故こんなに虚しいのか。

変わらなくては。

私は、私じゃない別の者に

” 変わらなくては ”

今の私ではダメだ。

まったくダメだ。

唇を噛む。

血など出ないさ。自分がどうしたって可愛いんだから。

” だから駄目なんだよ、お前は ”



わかってるって。

充分ってくらい、わかってんだよ。

心が叫ぶ。

冷静な私が呟いた。

”そう言ってるけど、できてないんだから、やっぱりお前は分か  
てない”

嘲笑う。嫌な笑い。

耳を塞ぎたい。

口だって、喋らないなら付いている意味ない。

こんな物事言わぬ口でよかったら、人魚姫にだってくれてやる。

醜い言葉しか出てこない、こんな口でよかったら。

## **I t i s アイ（前書き）**

無性に泣きたくなる。

叫んで、逃げ出してしまいたくなる。

だけど他人を傷つけられるほど腐っちゃないから、傷つくのはいつも――

## It is アイ

息を止めて

1秒、2秒、3秒

足掻いても足掻いても苦しくて

また呼吸を繰り返す確か

ねえ、ダレカ

泣き出す心臓の声きいて

傷だらけの右手から

その物騒なものはなして

ねえ

怖がりな目でこっち見つつも 夢中でナイフ振り回す

カワイソウな君

ナイフの上から抱きしめる

「僕なんてキライだろ」

胸を貫けば

漏れ出した愛に怯えた

「キライだよ」

なんて、弱虫の戯れ事

屈折してしまった淋しい光線

受け止めたげる

もう、いいから

泣いちゃって

泣いちゃって

君はぼくの一部なんだから

愛さないわけないんだから

「ねえ、僕のこと好きでしょう？」

いつか殺してしまった僕を

それでもひたすら抱きしめようか  
身が裂ける思いに噎び泣きながら

たったひとりの僕を愛するために

**I t i s  
アイ（後書き）**

一応……←←  
君⇨僕  
です。

## ツブヤキ

別れの時が確実に近づいている。  
見えないけれど。私の体内で時計が刻一刻。  
止まってくれない。

「悲しいの？」

困った顔して笑う。  
まったく、聞くまでもない。

「今生の別れ話？」

んなわけないでしょうが。五月蠅い、  
黙ってよ。頼むから。  
笑うなら死んで。

同情するなら滅びて頂戴。  
遠くで泣いてくれるなら  
こっちに來て。

力の限り抱きしめてよ。鋭い痛み、残してよ。

傷つくのはとても怖い。

けど一人はもっともっと怖くて。

呼ばれなくなった私の名は、きっと泡沫。  
風と共に去っていく。

## ひとり＋ひとり

きつと最初から弱かった。

涙で碧く染まった

両手の甲

見るたびに

造り上げる一人世界。

いつになっても一人ぼっちは寂しいまま。

這いずり回る希望

煩わしくて

「消えてくれ」

叫ぶのに

知らんふりの引きこもり。

聞く気はサラサラないようだ。

「虚しい期待になるのが怖い」

思い切り手を伸ばせないのは、多分そういうこと。

転んでしまったら立ち上がれない。

カメのように。

だ・か・ら？

「至極当然です」と言わんばかりに  
ヘラヘラ笑いながら今日も生きる。

極力真面目な●は言います。

「バカタレ。ちゃんと生きろよ」

きつとみんな弱かった。

アカイ口の液体が

体の真ん中からドクドクと泣く音は

君を抱きしめたとき

初めて聞いた。

泣きながら笑う二人世界。

いつになっても

一人ぼっちは寂しいまま。

寂しがりやで弱い僕だから

あなたを愛すこと、できたのかな。



**K  
I  
R  
A  
I**

やめてよ

なんでわかんないの？

それとも

故意に

わかろうとしないの？

だったらもう

いなくなつてよ

私の前から

姿消して

消えて

——消えろ

正しいって信じきってる顔が

ムカつく

大っっ嫌い

私の大事なものを  
簡単に切り捨てようとしやがって

あんたには

感情も人情も

何一つないって

それ、ただの驕りだろ

私たちのこと

何にも理解しようとしなくて  
力だけで押さえ付けて

ねえ

満足なの??

私の目の前で生きてる顔

ロクデナシの愚か者

死んでくれ

早く

早く

## 震え

寄り掛かることができるなら  
なんだってよかった

何でもいいから

他人より突出したものが欲しかった

私は何にもない人間だけど

それをわかった上で

他と違う”自分”を

他の誰でもない”自分”を

ずっと意地張りつづける虚栄心や

泣きっぱなしの劣等感が

あまりにも

凡人の私を許さないから

変わらなければいけない、と

ドロドロになった

醜い願望で

ひたすらに乞う

綻びる私が

あまりに恐ろしくて

おそろしくて

## 正しい人（前書き）

あたしがどれほど”間違っている”と喚いても  
あんたは絶対、聞きもしないんだろう。

## 正しい人

黒か白か

YesかNoか

真か嘘か

正か悪か

良いことか

悪いことか

不確かなことが多すぎて

迷わぬように

曖昧さを嫌う

はっきりしろと

誰かの怒鳴り声

―ああ、煩いな。

もうそのお説教は聞き飽きました

耳が痛いです

だからもう結構なんです

もういらない

あなたいらない

ねえ

だって

あんたは知らないじゃん

単なる餓鬼の戯れ事とか言っ  
てさ聞く耳持たないんでしょ

あたしはただの

馬鹿な子供

我が強くて

扱いづらい

面倒なシロモノ

捨てられたって

殴られたって

文句は言えないのかもしれない

厭な子供だから



## 告白（前書き）

——ねえ、先生、

私の話をどうか聞いてください。

そして、

できることなら

少しだけ、味方をしてくださいませんか。

単なる子供の戯れ事です。心のそこからの私の告白です。

## 告白

今から言うことを、先生はあまり真に受けないと思いますが、私が今、こういうことで悩んでいるということだけ知っててください。

●●●●のことについてです。

●●●●は、先生のご存知のように、たしかに実力のある先生であるとは思いますが。

現に、ああして結果を数字に残しているので、そこに間違いはないのでしょうか。ですが、先生、

先生は「教育」ということに関して、どのようなお考えをお持ちでしょうか。

英語や数学の問題を解く技術を教えることですか。

有名大学へ、生徒の多くを入れることですか。

それとも「人間として」優れた人材を育成することですか。

どれか一つだけが教育でしょうか。

技術をあげるためならば、別に生徒の内面は関係ない？

1番厄介とも言える、心の問題を、全く無視して技術だけを生徒に詰め込んでも、それを教育だと言えるんですか。

もしくは、先生もそうお思いですか。

教育ってなんですか。

……話が逸れました。すみません。

つまりを言うと、今、私は●●●●の教育方針が辛いと感じているわけです。

合う、合わないがあるでしょうが、少なくとも、今の2、3年生は非常に辛い状態です。

精神的に、です。

本来楽しいものであった部活も、最近ではあまり楽しそうではありません。

1年生は除きますが。

●●●は

絵を、作品を、とことん自分を基準にして良いか、悪いかを判断するようです。先生の専門は英語ですから、美術に関しては詳しくないと思われると思いますが、小・中学校で美術はやらなかったでしょうか。もし、一生懸命に作り上げた絵や作品を、教える側、つまり先生から

「これで7割だね」

と言われたら、どう思うでしょうか。

「これは美術じゃない」と、根っからの否定をされたら、一体どんな気持ちになるか、先生は想像できませんか。

ここは、決して美術の予備校ではないのに、です。

完全なる「意識の統制」

彼がやろうとしていることは、私たちはたかが生徒であるという位置付けをした上で、あたかもモノであるように扱い、自分もっている価値観やら評価基準やらを私たち「モノ」に一方的に押し付け、彼自身もつ「完全体」のいわゆるクローンを作ろうとしているのだらうと、

私の目からはそう見えます。

自由な発想で描いたものは、ただのガラクタだそうですよ。

●●●が技術的に優れているのだということは承知ですが、美術教育という点において、彼が優れた教師であるとは私は少しも思っていない。

思いたくもない。

ヘドが出る。

くだらない戯れ事を、私たちに押し付けしないで欲しいのです。

これは私のエゴなのでしょう。

勝手気ままの綺麗事。

世間知らずの詭弁論。

十代そこらで

教育について、

個性について、

人生について、

熱く熱く語っても

大人たちはただ鼻先で笑い飛ばせてしまう。私はあまりに世界を知らな過ぎるから。

―先生、

先生もしかしたら、私を嘲笑っているのかもしれない。

だけど先生、

教育は、まず心の発育だと思うのです。

それにはまず、自分の型に合わせて生徒を育成するというのはマズイのではないでしょうか。

”こうでなければならぬ”とは、なんて狭い世界なのでしょう傲慢で自己中な教育を

子供であるがために、私たちは黙って、

必要があれば●●●のご機嫌をとって、

耐えなければならない。

―とても理不尽だと思います。

私たちはたしかにまだ

単なる子供ですが

しっかりと感性を持ち、  
勉強をし、言葉を話し、  
ちゃんと生きてきた。

それを見下し、

権利で押さえ付けるのは

私たちにとっては侮辱も同じことです。

先生、

先生、

私はあれを

「先生」と呼び、敬うことをしたくありません。

人間として

心底嫌悪します。

吐き気がします。

消えて欲しいとさえ

願ってしまいます。

——先生、

私は、

いやな生徒でしょうか。

## R a i n (前書き)

私が誰かを好きだと想うのは、どこか辛さに似ています。

悲しいわけでは決して無いし、無理しているわけでは絶対ない。

明確な答えは見つかりそうもないけど、多分、

愛おしくてたまらない。

そういうことなのかもしれません。

## R a i n

土砂降りの雨の中、  
薄ぼんやりと見えてきたのは  
一人よがりの皆ぼっち。

知ってしまったら、  
もう止まらなかった。  
みんなすごくいい人たちなんだ。  
お世辞でもなんでもない。本当にそうなんだ。

だから、  
自分勝手な孤独に沈んでいた我が身を、  
その不甲斐なさを、  
私は恥ずかしく思う。

”誰も信じられない”と両耳をキツく塞いで泣いた夜だって、  
もしかしたら孤独じゃなかったのかもしれないのだから。

客観視だって、  
一種の「アイジヨウ」だったんだ。  
私はいつも寄り添うばかりで、そうすることだけが優しさだと思っ  
てた。

思ってた痛かった。

甘くだらけた「キレイな私」を叱って、  
涙で濡れた頬をそのままに、  
頼り切ってた誰かの手をそっと離そう。  
今こそ、

私は両の足で立たなければ。歩き出さなければ。

胸が苦しいなら苦しいままに、

”死にたい”と喚くなら

”生き続ける”罰を。

他人に愛されたいのなら、愛されなくても、

愛し続けるひたむきさを。強さを。

痛みによく似た、燃えるように赤い”アイ”を。



？  
(前書き)

正しいと正しくないの間、道徳的でない自分が揺れ動く。  
悪いことだとわかってる。人を憎むこと。  
キライになること。

？

なくなつていい命はないと、そう思う。

熱く語ることはいらない。

ただ、常識みたいに自分の中で横たわっているものだから。

深く考えることはしない。綺麗な言葉で論理づくようと必死になるし、ウソっぽいから。

ウソっぽい自分はキライだ。

いつも後ろめたさを引きずるようになる。

格好つけて進む分、向き合ってくれた人達を裏切ってるってことだろ。

そんな下らない人間になりたくない。

だけど時々思うのは、

人を殺めた者にも同じことが言えるのかってこと。

赤の他人が殺された時じゃなかったら。

私の身近な人がその人に殺されてしまったら。

私はその人を憎まずにはいられないと思う。

殺したくだってなるかもしれない。

そう考えると、

”なくなつていい命はない”なんてのは完全な綺麗事で、傷付いたことのない人が唱える、世間知らずの詭弁だ。

## 屋上と出会い（前書き）

”俺”と”彼女”のオハナシ。いつかこの話をちゃんと書いてみた  
いす（＊＾―＾＊）

## 屋上と出会い

「あー……寒」

氷のような空気を吸い込んで、肩を縮める。

手袋も何もしていない両手の指先は、ちぎれそうなくらいかじかんでいた。

既に感覚はなくなり、あまり力が入らない。

真冬の空は眩しく晴れ渡っているわけもなく、どんよりと不服そうな灰色雲がどこまでも、光を下界に射すことを許そうとしなかった。

(……でも、丁度良い、かな)

今日で最後の日には丁度良い。そう思う。

ここはある学校の屋上。

柔らかそうな栗色の髪を、冷たい風に揺らす少年が一人、茫然と立っていた。

空虚な双方の瞳は光を無にしてしまいそうなくらい輝きを失っている。

事実、彼は希望というものを持ち合わせていなかったし、今日だって、ここから飛び降りるためにやってきた。

あまり高さのない鉄柵を軽く乗り越え、空を仰ぎ見る。

曇り空が風で流されるように、ゆっくりと場所を変えていく。

そんな雲がひどく羨ましいと少年は感じた。

でも、今となってはもうどうでもいいのだ。

自分はここから飛び下りて死ぬのだから。

15年間生きて、これで何もかもが消滅する。

「自殺した」

「15歳なのに」

というニュースがテレビや新聞で独り歩きして、多少、人々に衝撃を与えることができるかもしれない。

それでいい。

それが、いい。

俺はここにいたのだと、これで証明できる。

やっと、楽になれるのだ。別にいじめられているわけじゃない。

父は自分が幼い頃に離婚してそれっきりだが、特別困ったこともないし、家計だって母一人で十分賄ってくれて、むしろ良い暮らしをさせてもらっている。

たとえばほとんど母親が家に帰らず、仕事優先なのだとしても、それは俺のためでもあるはずだ。

何も不満はない。

友人だって多い方だろう。

恵まれていた。

十分過ぎるほどに恵まれていた。

俺はきつと、すぐく我が儘な人間なのかもしれない。これだけ幸せな暮らしをしてもなお、物足りない。つまらない。退屈だと思ってしまう。

自分の存在が消えていく。そんな気がした。

だからそうなる前に、自分の意志でこの世界から存在を消したいのだ。

肺にいっぱい冷気を吸い込む。

驚くほど脈が落ち着いている。

一步踏み出せば、遥か下が小さく小さく見える。

かなりの高さにクラクラする。

もう一步踏み込んで、鉄柵から手を離そうとしたとき、背後で重く

錆び付いた扉の開く音が響き渡った。

ガギギギッツガチャン

軽く後ろを振り返ると、そこには黒づくめの服を着た女が、長い黒髪と膝丈よりも下のロングスカートを風になびかせ立っていた。前髪が長いせいか表情が見えず、格好が格好なので異様なオーラを放っている。無言でこちらに走り寄って来るにつれて、詳細がはつきりしてゆく。

色の白い、華奢な体型の女性だった。歳は、自分よりも少し上か、もしくは同じくらいかもしれない。

そしてついに俺の目の前にまで来た。

真っ白い陶器のような顔に二つの二重の目。

必要以上の肉がついていない、細く尖ったあご。とても今時の女の子には見えないが、ただ、綺麗だと思った。

折れそうなくらい細い腕が、鉄柵の間からのびてくる。震えながら俺の襟足を掴んだ。

肩を上下に揺らしながら、強く。とても強く。痛いくらいに。

顔が哀しそうに、怒っているかのように歪んだ。

「……この、大馬鹿もんが!!」

綺麗に整った唇から、全く似合わない乱暴な言葉遣い。腹の底から唸るような、それでも澄んだ不思議な声。

すでにこの時、俺は彼女に捕まったのかもしれない。

\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*  
\*\*\*\*\*

## ナミダの証明〈cry in sympathy〉

朝から雨が降っていた。

たったそれだけのことが理由ではないだろうがけど、確実に心が沈んでいる。

普段はよく理解できない自分が、今は意外にもはっきりわかるような。

けれど

ひどく冷たいくせ、ジクジクと喉元を焼く熱のカタマリに喘ぐのは、他の誰でもない。

私自身なのだ。

「はははっ……」

灰色のぼんやりとした部屋で、小さく笑った彼の声は疲れたように力無く。

曖昧さ故か、静かに分散して消える。

ぐずりだした空はナミダの止め方を忘れてしまったみたいに困った顔をしている。

「なんか、泣きすぎたみたいだ」

はは、と。

ほんの少し空気を震わせるだけの浅い吐息だった。  
ねえ。

あなたが私に教えてくれた”笑顔”って、そんなのじゃないでしょう？

もしかしたら、彼は私に嘘でもいいから微笑み返して欲しかったのかもしれない。一時であっても、本物みたいな安堵が欲しかったの

かもしれない。

だけど私は笑わなかったし、何も言わなかった。

椅子に座り、私よりも少し低い位置にある顔を眺めるだけで、  
どうすることも。

「私のせい？」

弱々しく掠れた声がしたと思ったら、自分の声でびっくりした。

それはあちらも同じだったようで、目を見開き、口を微かに開けた。  
しかし、その口から紡がれるのは一言もなく、すぐに唇を引き合  
わせた。

彼は首を横に振る。

”ちがう”と。

世の中の不条理に  
理想を捨てるみたいに。  
諦めたように首を振る。

―ここにいるのに。

私、ずっといるから。

冷たい雨に、一人、  
泣いたりしないで。

ねえ

聞いている？



「愛してる」

**a t t h a t t i m e (前書き)**

二人の少年のオハナシ。  
のんびりしたお昼どき。

## a t t h a t t i m e

ぬるい風が頬をそつと撫でる。

程よく乾いていて気持ちいい。思わず目をつぶってしまいたいそうだ。

真っ青な空の下に、濃く色付いてきた緑色。艶やかなそれは、日の光を浴びて更にキラキラと生きているみたいだった。

寝そべって空気を吸い込む。

目の前には真昼の青空が広がっている。

穏やかな午後12時半。今は昼休みだ。

10分だけ、と浅い眠りにつこうとしたその時。

ぱしゃ、ぱしゃしゃ。

地面のアスファルトに水音が響く。俺の頭にも細かな冷たい飛沫がかかった。

閉じかけた瞼を細め、右を向く。

「…なにやってんだ蒼井」

細長い体型の友人に話しかける。

少しの間があり、

「ん——？」と呑気な声。

ゆっくりと俺の方を見て不思議そうな顔をし、ああ、と思いついたように口を開く。

「いやね、暑いじゃん。

ちょーっと涼もうかと思ってさ」

もう一年近くの付き合いになるため、驚きはしない。初めて会った時から今まで、コイツはずっとこういうやつだ。

だから、身を起こして蒼井を見て、まだペットボトルの水を頭から

バシャバシャ被っていても、俺は軽いため息をつくぐらいしかない。  
再び寝そべろうとしたところ、蒼井がペットボトルの口をこっちに  
向けた。

ばしゃ。

「……………は……………」

何の突拍子もなく、ペットボトルの水をかけられていた。―頭から。  
結構な量を。

襟足から、つ―、と水が伝い、前髪からはボタボタと滴が落ちてい  
く。

自分がされたことを把握するのに、そんなに時間はかからなかった。

「理久も暑いっしょー？」

おすそ分け――…あれ、」

細長い体を屈めて俺の顔を覗き込むなり、へらっと笑った。

嫌がらせではないと知っている。だから怒るに怒れず、顔だけが引  
き攣る。

「え――理久顔こわ……………もっと水ほしいの？」

更に水をかけようとするので、直ぐさま右手で制止した。

少しだけ不思議そうな顔で首を傾げると、立ち上がった状態で、残  
りの水を空に向かってぶちまけた。

透明な雫が歪みながら、形を変えながら、スローモーションになっ  
て見えた。

大粒のビー玉が蒼井の手によって空に浮いたその一瞬。

清々しく、爽やかな輝きに目を見張ったのは、俺だけだろうか。蒼

井は細長い体を更に細長く伸びをして、まるで風と一体化しているみたいに空気を吸い込んでいる。

長めのフワフワとした栗色の髪はまだ濡れているが、そよそよと風に泳がされていた。

コンクリートにできた黒い染みを、まだ優しい太陽がゆっくりゆっくり、乾かしている。

まったく……

あと20分で乾くだろうか。自分の髪とシャツが、ぐっしより濡れているのを見て、ため息をつく。

半ば諦め気味で再び地べたに背を預ける。

微かな温かさに安心する。目の前の大きな雲は、物音たてずに流れていて、つくづく、あれからもう一年が経つのだと、ぼーっとせずにはいられなかった。

**a t t h a t t i m e (後書き)**

そのうち、彼等の過去を書いていきたいです。  
ちゃんと、長編で。

……いつになるか分からないけど？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9769p/>

---

淋シキ人間ノ愛唄

2011年10月6日20時39分発行